

●優秀賞

「学び」のある書写授業の創造

～清書完結型授業からの脱却～

高知県本山町立嶺北中学校 おおたにとしひこ
大谷俊彦



1 はじめに

1980年以降、ワープロやパソコン、携帯電話などが急速に普及し、情報伝達手段に大きな変化が生じてきた。私たちの筆写活動や文字環境も大きく変わり、日常生活から文字を書く機会が減少し、それに伴い、国語科書写への関心も薄らいできている。

2006年12月には、「国語科の必修領域なのに書写を実施していない中学校が多い」との指摘を受け、文部科学省の教科履修状況調査が全国的に実施されたが、公立中学校の25%、4校に1校は毛筆を使った書写の授業は3学期にまともに行っているという実態であった。

一方、小学校においても、前任校（県立高知南中学校＝併設型中高一貫教育校）で、平成23年度・24年度に中学1年生（出身小学校63校）を対象に実施したアンケート結果では、64%の生徒が、「小学校で書写の時間はほとんどなかった・全くなかった」と答えており、これで適正に実施されていると言えるのかと首を傾けたくなるような実態もうかがわれた。

2 主題設定の理由

それでは、なぜ国語科における書写の指導が適正に実施されないのだろうか。

平成23年度（小学校）、24年度（中学校）から完全実施されている学習指導要領では、「書

写」は、国語科の「言語事項」から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」という新しいカテゴリーで示されることとなった。

小学校の「書写」の配当時は、「毛筆を使用する書写の指導は、第3学年以上の各学年で行い、（略）毛筆を使用する書写の指導に配当する授業時は、各学年年間30単位時間程度とすること」、また、中学校では、「書写の指導に配当する授業時は、第1学年及び第2学年では年間20単位時間程度、第3学年では年間10単位時間程度とすること」と、書写は従来どおり国語科の年間配当時に含まれる形で示されている。

しかし、この示し方こそが、適正に実施されない大きな要因の一つではないだろうか。

入学したばかりの中学校1年生の生徒から「明日の書道の時間は何を書きますか？」「明日の習字の時間は教科書を使いますか？」と尋ねられることがある。驚くのは、「書写」は小学1年生から6年間学んできたはずなのに、この段階になっても「書写」と「書道」「習字」の言葉の区別がついていないことだ。

前述したとおり小学校学習指導要領では、小学校3年生以降「書写」の授業は30時間×4学年で合計120時間実施されなければならないことになっており、1年生から「国語」とは別に「書写」の教科書が配られ、教科書を使って学習してきたはずである。

ここで、他教科を例にとって考えてみたい。「家庭科」は、小学校5・6学年で合計115時間実施することとなっている。「書写」には、「家庭科」よりも多く時数が配当されているのである。ところが、「家庭科」を適正に実施していない学校があれば職員会や保護者会で大きな問題として取り上げられるのに、「書写」を適正に実施していなくてもさほど大きな問題にはならない。

ここに、「書写教育」の大きな課題があるのではないだろうか。国語科の配当時数に含まれて示されているため、書写の授業を実施しなくても、「国語の年間授業時数が充足されればそれでよし」となっているのではないだろうか。そうした書写授業の現状が、中学生になっても「書写」という言葉が使えない現実につながっているのだろう。

次に、子どもたちが「習字」や「書道」という言葉を頻繁に使う理由についても考えてみたい。

多くの子どもたちは、小学校低学年、早い子は就学前から町の「書道塾」や「お習字塾」に通っている。そこでの、手本を絶対的な規範としてひたすら書き写すという学習過程と、学校教育の「書写」授業を同一視してしまっているのではないだろうか。このことは、我々小中学校の教員が大いに反省すべきところである。これまでの書写の授業では、①手本を見る、②手本の書き方を知る、③練習する、④朱墨での添削を受ける、⑤清書する、といった町の「書道塾」の教え方と変わらない指導方法が多く見られた。このことが、子どもたちを惑わせた要因であることは間違いない。

算数や理科などの教科では、教科書を使って最初から順に学習していくことから、中学に入学した時点では定着の差はあっても、履修内容についてはほとんど差が見られないが、国語科書写については、小学校での履修内容に大きな差が生じているのである。

ほかにも「書写」の授業が適正に実施されて

こなかった理由として、書写の授業をする教師は、毛筆が上手でなければならないといった「毛筆至上主義」の影響から、毛筆嫌いの教師を多数生み出してきたこと。さらには、「書写の指導=毛筆の指導」、それも作品の優劣だけを競うといったいわゆる「作品主義的指導」に終始し、「毛筆は硬筆の基礎」という書写本来の目的である、文字の書き方の原理・原則の理解から、他の文字へ応用していくという「書写」の原点を見失ってしまっていたことなどが考えられる。

こうした背景には、教員の「国語科書写」に対する認識の差が大きいことが挙げられる。また、前述したように、一つの手本を何度も何度も書き写すといった作品制作に重点を置いた「清書完結型授業」からいまだに脱却していない現状や、「筆を使って板書できない」「書写は苦手」といった「教員の書写授業からの逃避」などが考えられるのではないだろうか。

そこで、中学1年生の入学当初に、「小学校での書写の学習に関するアンケート」を行い、「意識面」と「知識・技能面」の両面からの調査・分析を通して、小学校段階での書写教育の課題を発見し、新たな「学び」のある書写授業を創造し、高等学校芸術科「書道」への円滑な接続を図る工夫を提案したいと思い、本研究に取り組むこととした。

3 書写の授業をどのように変えるのか

小・中学校での国語科書写の年間授業時数は限られている。児童・生徒にどのようにして興味・関心を持たせるか、いかに効率よく目標を達成させることができるか、さらには、いかにして学習の日常化を図れるかが、今後の書写指導に問われているのである。そのためには、まず授業を変えなければならない。これまでのような手本を中心に据え、清書することを目指す「清書完結型授業」から、書写の授業を通して思考力・判断力・表現力、課題解決力や応用力などの定着を目指す書写授業へと授業が変わらなければならない。

4 研究の実際

(1) 生徒の実態把握

生徒の実態把握のため、2年間にわたり調査した。

- ・調査方法：アンケート
- ・対象者：中学1年生 生徒120名×2年＝計240名
- ・出身小学校：63校（県内61校、県外2校）
- ・調査時期：2010年4月・2011年4月



筆者の書写授業の様子

① 意識面

生徒の書写の学習に関する意識面を見るため、「書写の学習は好きですか？」という問いに関しては、「好き」が43%、「嫌い」が57%であった。

好きな理由としては、「心が落ち着くから」が39%、「字がうまくなるから」が29%、「集中できるから」が19%であった。一方、嫌いな理由としては、「字が下手だから」が56%、「なかなか上達しないから」が27%、「準備や後片付けが面倒だから」が9%となっている。

また、「字がうまくなりたいと思いますか？」と聞くと、「思う」が96%、「思わない」が4%であった。

次に、「文字を書くのにパソコンを使ったことがありますか？」という問いに関しては、「ある」が61%、「ない」が39%であった。

また、「手紙をもらうならパソコンより手書き文字のほうがうれしいですか？」という問いに関しては、「はい」が92%、「いいえ」が8%であった。

【考察】

ほとんどの生徒は、字がうまくなりたいと願っているのに、字が下手だから、上達しないから書写の学習は好きではないと答えているのである。

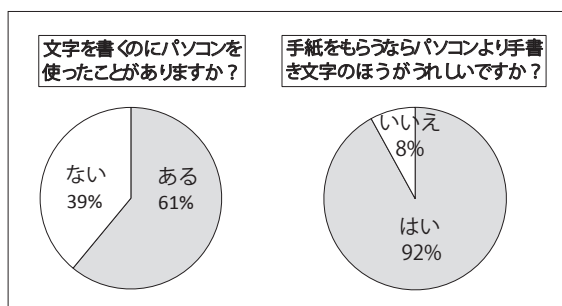
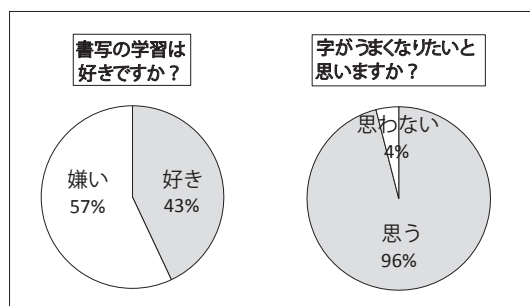
こうした傾向の背景には、書写の授業において、文字の整え方の原理・原則を教えずに、作品の優劣だけを競ういわゆる作品主義的指導に終始してきたことが大きな要因と考えられる。

また、パソコンが普及した現在でも、多くの生徒たちは、手書き文字のよさや温かさを求めている。手書き文字から、書いた人の個性や気持ち、状況などを感じ取っているのである。この結果は、書写教育に携わる者としては少しうれしい結果であった。

② 知識・技能面

ア 筆順

教科書に筆順の解説が出ていて間違いやすい次ページの10個の漢字について、特定の一画を太字で示し、その点画が何画目かを数字で答える方法で調査を実施した。



区(3年) 右(1年) 何(2年) 成(4年) 式(3年)
飛(4年) 乗(3年) 非(5年) 馬(2年) 性(5年)

や も よ せ

正答率が50%以下と正答率が低かったのが、「区」の15%、「飛」の15.8%、「式」の44.2%、「乗」の46.7%、「何」の47.5%、「成」の50%であった。

次に、中学生でも間違いの多い上の4個の「ひらがな」の筆順について調査した。

正答率は、「や」が62.5%、「も」が75%、「よ」が83.3%、「せ」が85.8%であった。

【考察】

10個の漢字のうち6個が50%以下という結果であり、小学校での定着率が低いことがわかる。なかでも、平成生まれの生徒たちが、生年月日の「成」の字を二人に一人しか正しく書けていないということは意外であった。ちなみに、「成」の字は小学校6年生の教科書(東京書籍P.9・10)「筆順と字形」の単元で「成長」という題材を使って学習することになっている。そこには、筆順のポイントとして「左ばらいを横画よ

りも先に書く」と解説されており、「皮」や「感」なども同じ筆順で書くことと記載されている。

また、小学校学習指導要領の第1学年及び第2学年「書写に関する事項」の(2)イに「筆順に従って文字を正しく書くこと」と示されているにもかかわらず、小学校1年生で学ぶ「ひらがな」の筆順の定着率が9割を超えていない文字が複数あることもわかった。

イ 字形

次に「書」と「友」という小学校4年生の教科書に出てくる文字を使い、「画の長さ」と「画の方向」について「字形の整え方」の定着率を調査した。



【考察1】「書」

この字のポイントは、4年生の教科書(P.35)にあるように、「横画」が二つ以上あるときは、その一つを長く書く」である。

この原理・原則を踏まえ、正しく書けていた生徒はわずか2.5%しかいなかった。95%の生徒は、下のように2画目と5画目を2本とも長く書いている。

この原理・原則を知っていて、学習内容の意味を理解していれば、生徒はもっと注意を払って書くはずである。



この「横画の長さ」の原理・原則は、次のような文字を書く場合にも当てはまる（筆者調査による）。

- 1年…「王」「三」「青」「車」「草」など
- 2年…「言」「元」「寺」「長」「麦」など
- 3年…「苦」「事」「童」「美」「葉」など
- 4年…「案」「喜」「卒」「票」「要」など
- 5年…「基」「査」「妻」「素」「豊」など
- 6年…「革」「至」「垂」「専」「善」など

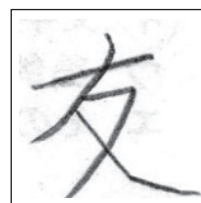
【考察2】「友」

この字のポイントは、4年生教科書（P.35）にあるように、「二つの『左ばらい』とも下の方にあるときは、先がせまくなるように書く。それ以外のときは、先が広がるように書く」である。

この原理・原則を踏まえ、正しく書けていた生徒は57.5%であった。42.5%の生徒は、右のように2画目と3画目を先が広がるように書いている。

までの書写授業のあり方に原因があるものと思われる。

そこで、「学び」の視点を取り入れた「学習者中心型」の書写授業の創造について提案していきたい。



提案1（小学校）「日常生活に役立つ書写授業Ⅰ」

「画の長さを考えて書こう」（小4）

(2) 「学び」のある書写授業の創造

小学校で学ぶ文字の整え方の原理・原則が十分に定着していない背景には、「お習字的」とか「手本への依存」などと非難されてきたこれ

【ポイント1】学年の系統性を図る。

前学年までの既習事項の確認から始めたい。

小学1・2年生の教科書では、「画の長さ」

4年で学習すること					
毛筆					
「右」の筆順	「左」の筆順	「左ばらい」の方向	「横画」の方向	画の間かく	画の長さ
14ページ	14ページ	11ページ	11ページ	9ページ	9ページ
●「左ばらい」が先、「横画」が後。 …「左ばらい」が短く、「横画」が長い。 右	●「横画」が先、「左ばらい」が後。 …「横画」が短く、「左ばらい」が長い。 左	●二つとも下の方にあるとき …先がせまくなるように書く。 ●それ以外のとき…先が広がるように書く。	●少し右上がりに、同じ方向にそろえて書く。	●同じ方向の画が三つ以上あるときは、画の間かくをそろえる。	●「横画」が二つ以上あるときは、その二つを長く書く。（縦画や左ばらいでも同じ。）

35ページ

「友はらい」の方向

「横画」の方向

●少し右上がりに、同じ方向にそろえて書く。
●二つとも下の方にあるときは、先がせまくなるように書く。
…先が広がるように書く。

先が広がる

冬

列

先がせまくなる

麦

返

二つの「左ばらい」の方向を考えて書こう。

この「左ばらい」の原理・原則を使って「先がせまくなるように書く」文字には、2年の「夏」「後」「麦」、3年の「級」「反」「坂」「板」「返」、4年の「愛」「変」、5年の「版」「複」「復」、6年の「吸」「暖」「腹」などが当てはまる（筆者調査による）。

一方、「先が広がるように書く」文字として、1年の「夕」「名」、2年の「冬」、3年の「祭」、4年の「各」「察」「然」、5年の「格」「額」「際」、6年の「処」などがこれに当たる（筆者調査による）。

という単元が設定され、「三」や「生」、「土」や「立」といった文字を使い、あらかじめ引かれた補助線により「長い横画を見つめる」といった学習が行われている。

これを受けて、4年生では、「羊」(P.9)という字を使い、教科書に自分で補助線を引くことで、一番長い横画に気付かせる内容となっている。ここでのねらいは、『横画』が二つ以上あるときは、その一つを長く書く」と字形が整いやすいという「画の長さ」の原理・原則を理解し、定着させることである。

【ポイント2】ねらいを意識して練習し、児童の書いたものを正しく評価する。

この4年生の毛筆を使った学習のねらいは、「羊」を正しい筆遣いで上手に作品化することではない。横画の長さを意識して書いたかどうかが重要なのである。児童の書いたものを、ただ朱を入れて「直す」のではなく、児童自らが「気付き」、学んだことを意識して書いているかを評価することが大切なのである。

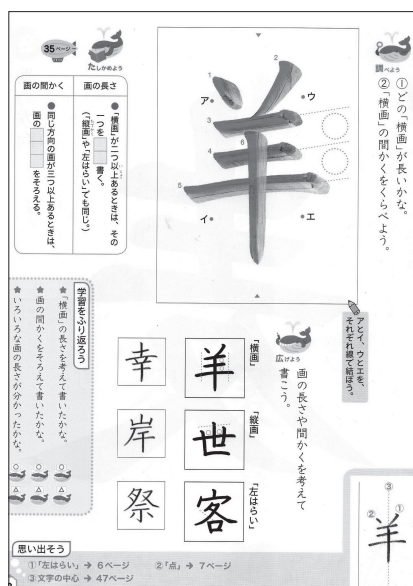
今までの「作品コンクールの評価」から脱却し、授業のねらいをもとに、児童の書いたものを正しく評価していきたい。また、一人一人の向上に焦点を当てた到達度評価も積極的に取り入れていきたい。授業の導入で「試書」(手本を見ないで行う)を行い、その後「文字の整え方」を学習し、原理・原則を理解して書いた文字と比較することで、「上達する喜び」や、「達成感・成就感」を味わわせたい。こうした授業

を繰り返すことで、「字が下手だから」とか「書写の授業はうまい子だけがやればよい」といった児童の誤った授業観・評価観から抜けだし、書写授業への意欲喚起へとつながるのではないだろうか。

【ポイント3】ねらいが他の漢字にも応用できることを理解し、ねらいの定着を図る。

「羊」を毛筆で練習した後、『横画』が二つ以上あるときは、その一つを長く書く」という文字の整え方の原理・原則を踏まえて、1年生で習う「青」「車」「王」の文字を硬筆で書いてみる。

最後に、2年、3年生で学習する「言」「寺」「事」「美」「葉」の文字についてテスト形式で



定着度を確認する。

書写の授業は、毛筆の学習だけで終わるわけではない。毛筆はあくまで硬筆による書写能力の基礎を養うために行うのであって、毛筆を使って文字を書く方法を「理解」し、硬筆で「定着」を図るのである。今までのような「毛筆の技能」に偏っていた評価から、今後は「知識・理解」に関する評価や「関心・意欲・態度」といった学習への取り組みの様子を重視した評価へと転換していかなければならない。

「ああ、そうだったのか」「こうすればうまく書けるのか」といった気付きや発見のある授業を継続実践していけば、児童は、「書写の授業は日常生活に役に立つ」と書写授業の有用性を体感するはずである。

提案2 (中学校)「日常生活に役立つ書写授業Ⅱ」

「日常生活で多く使う文字や言葉を書こう」(中1)

【ポイント1】小学校書写の概念を変える。

中学校1年の1学期は、小学校書写の教科書を使い、文字の書き方の原理・原則の理解から他の文字への応用に重点を置いた指導を行い、書写で学習したことが日常生活に役立つことを実感させ、「書写」の授業に対する子どもたちの「概念崩し」を行う。その際の指導は硬筆学習とし、今までの「書写」=「^{イコール}毛筆」という技能重視のイメージを払拭し、「知識面」に重点を置き、「思考力・判断力・表現力」をはぐくみ、「主体的に学習に取り組む態度」を養いたい。

こうした授業開きをすることで、書写授業の「魅力」や「有用性」を伝えていきたい。

【ポイント2】自分の名前を正しく整えて書く。

授業を教えていると、生徒から「自分の名前のバランスがうまく取れないのですが、どうしたらうまく書けますか?」という質問を受ける。実際、生徒たちは学校生活のなかで、自分の持ち物や提出物、テストなど一日に何度となく自分の氏名を書いている。

ところで、今までこの最も身近な氏名の書き

方について、学校教育のなかで取り立てて指導することがあったであろうか。子どもたちは、氏名の書き方については、保護者から教えられたか、見よう見まねで覚えてきているのが現状ではないだろうか。教員側からすると、「一人一人違う氏名についてお手本を書き、個別に指導することなど不可能だ」という理由から「自分の名前をきちんと書こう」という指導を避けてきたのではないだろうか。確かに一人一人に名前のお手本を書くとなると大変な労力だし、全員の国語科教員ができることではない。また、今までのお手本を書き写すといった書写授業の形式では不可能だったのかもしれない。しかし、文字の整え方の法則性や原理・原則を教えることで、ほとんどの文字に応用することができることを知っていれば、そんなに難しいことではない。

例えば、前に述べた「友」や「麦」の、「二つの『左ばらい』とも下の方にあるときは、先がせまくなるように書く」という原理・原則は、「夏」「愛」「坂」「優」といった氏名で多く使われている文字に応用できるはずである。また、「羊」や「美」の、「『横画』が二つ以上あるときは、その一つを長く書く」という原理・原則は、「葉」「元」「真」「華」「幸」などに応用できる。

こうした実態を踏まえつつ、中学校1年生の1学期には、小学校と逆の発想で、実際クラスにいる生徒氏名の文字を使いながら、文字の整え方の原理・原則を教え、「自分の氏名を整えて書く」という最も身近な日常化につなげていきたい。

【ポイント3】学んだことが使えることを体感する。

ほかにも、「住所」や「学校名」、「都道府県名」や「手紙やはがきで使われる語句」などを授業に取り上げることで、生徒は「書写」授業の有用性や必要性、「学んだことが使える」といったことを体感するはずである。

提案3 (中学校)「書く楽しさを実感する書写学習」

「好きな言葉を漢字一字で表そう」(中3)

【ポイント1】書く課題は自分で決める。

生徒が今まで書写の授業で書いてきた文字や言葉は、教科書に掲載されたものや教師に指示されたものが多く、「何という言葉を書くか」ではなく、「与えられた言葉をどのように書くか」に重点が置かれていた。

そこで、今回は、まず書く文字や言葉は生徒自らが選ぶことから始める。すなわち、この授業では書く課題を自分が決めるのである。そこで、生徒が主体的に言葉を探せるように、「漢和辞典」や「国語辞典」などを用意し、生徒が主体的に言葉を選ぶ場面を設定する。人は、言葉によって励まされたり、癒されたりすることがあることを伝え、意味のある漢字を考えさせる。さらに、家の中で飾る場所等も考えさせることで、相手意識や目的意識、場面・状況意識を持って取り組ませたい。また、生徒が意欲的に取り組めるよう、その言葉を選んだ理由を、日テレ系「1分間の深イ話」になぞらえ、「深イ理由」として「構想シート」に書かせる。

構想シート

- 選んだ漢字（ ）
○家の中で飾る場所（ ）
○その漢字を選んだ「深い理由」



書写の授業風景

【ポイント2】文字をイメージする。

今回は、新たに学習指導要領に示された「身の回りの多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書く」を目標とし、身の回りの様々な文字の取材から始めることとした。生徒は、町の道路標識や橋の名前、店の看板やメニュー、新聞や本のタイトル、表彰状やチラシ、表札やハンコといった様々な文字を、写真に撮ったり実物を持ち寄ったりして集めてきた。次に、「言語活動の充実」を図るため、集めてきた文字からどういうイメージを受けるかという話し合いの場面を設定した。生徒たちからは、「この優しい文字が好き」「この文字が商品のイメージとマッチしている」「本の内容と題字が合っている」といった声が聞かれ、こうした活動を設定したことで、学習への興味・関心が高まり、自分の書く文字のイメージにつながったようである。

【ポイント3】 作品づくりと発表会

自分で決めた課題に従って、いくつかの基本
形を参考に構成や書体を考え、半紙を半分に折
り、実物大（うちわの大きさ）にして練習する。

次に、自分の印を消しゴムで作る。できあがった作品には、印を押して完成させる。印には、不思議な力があり、生徒はこの朱色の印を押すことで作品への満足度が増すようである。

最後に、完成した作品について発表会を実施する。その言葉を選んだ理由や作品に込めた思いなどを他人に伝えることで、さらに「言語活



生徒作品

動の充実」を図っていきたい。

【ポイント4】高等学校「書道」への接続

この活動は、書写というより高等学校芸術科書道の「漢字の書」の創作活動に近い活動である。生徒たちは、今までの「与えられた学習」ではなく、自分で言葉や構成を決めて書いていくといった「主体的な学習」を行うなかで、いろいろと悩みながらも、生き生きと学習を進めていく。このような発展的な学習である「創作」活動や、発表会で他人の作品を見る「鑑賞」活動を取り入れることで、高等学校「書道」への円滑な接続を図り、興味・関心を高めたい。

提案4 (中学校)「美術科とコラボした新授業モデル」

「水墨画を描こう」(中1)

【ポイント1】伝統文化に触れる。

水墨画の授業というのは、「書写」・「美術」の双方に関連した部分が多く、あまり学校教育では取り入れられていない。そこで、美術科の教員と一緒に水墨画の授業を構成することとした。

水墨画は、墨を材料として、その濃淡を利用して立体感を表現する。「墨」という伝統文化に触れる絶好の機会でもある。そこで、最初に、奈良から墨づくり職人を招き、「握り墨体験」を行うこととした。生徒たちは、今まで固形の墨しか見たことがなく、墨のつくり方はほとんど知らない。最初に墨のつくり方の説明を受け、実際に柔らかくて生温かい墨に触れ、自分の手形が付いた世界に一つしかない「握り墨」をつくった。この体験は、伝統文化を体得する貴重な学習であった。

次に、「墨擦り体験」を行った。初めて墨を擦った生徒が大多数であった。その後、絵筆や連筆に墨を付け、実際に水墨画を描いたのだが、書き直しができない一発勝負だけに、緊張感が張りつめたなか、真剣に紙と向き合う生徒の姿は印象的であった。



生徒の水墨画作品

【ポイント2】書写授業の新たな可能性を探る。

今回は、美術科とコラボした授業提案であったが、国語の授業内容とリンクさせ、俳句や案内状を筆で書いたり、音楽や体育のダンスとコラボして書道パフォーマンスをしたりと、まだまだ書写授業は広がりの可能性を秘めていると考えられる。

- 字を書くのが楽しく、書写が好きになった。
- 少しだけど、字がうまくなった気がする。
- 字に自信が無かったけど、少し自信がついた。
- 字を書くとき、画の長さを考えるようになり、文字の整え方がだんだんわかってきた。
- 文字の成り立ちや文字の整え方など、知らなかったことがわかり役に立った。
- 「とめ・はね・はらい」が苦手だったけど、教えてもらってうまく書けるようになった。
- 授業で習ったことを生かして字を書くと、上手に書けるので嬉しかった。
- 今まで間違ったまま自分の名前を書いていた。もっと早く正しい名前の書き方を教えてほしかった。
- 家の人に正しい名前の書き方を教えてあげたい。
- 漢字一字なのに、線の大小やかすれ、形の変化で字の表情が大きく変わるのには驚きだった。
- 家がお店をやっているの、早速、自分の作品をお店に飾りたい。
- イメージどおりの楽しそうな「楽」が書けた。満足！
- 墨が「すす」から作られていることは驚きだった。
- 水墨画は難しかったけど、集中して描くことができた。
- 白と黒でこんなに遠近感や立体感を出せるのはすごいと思った。
- 普段の生活に役立つ授業をもっともっと増やしてほしい。

(3) 授業実践を通しての生徒の反応や感想

「書写授業を変える」、「生徒の意識を変える」という思いで授業実践を行ってきた。生徒に「書写の授業のイメージが小学校とは変わりましたか」と尋ねたところ、8割以上の生徒が肯定的に変わったと答えている。書写の授業に対する生徒の感想は上のとおりである。

5 おわりに

今回の学習指導要領の改訂では、我が国の「伝統や文化」に関する教育の充実についての記述が、従前よりも一層明確に示されている。

「文化」の「文」を「文字」と考えると、我々は「文字」を使うことで社会生活を豊かにし「文化」を築いてきた。「文字」そのものが「伝統」「文化」であり、「文字」とかかわり親しんでいくことが、文化の継承につながる。こう考えると、「書写・書道教育」は「文字文化」の発展の中心を担っていると言える。

コンピュータや電子メールの普及により、我々を取り巻く文字社会は大きな変化を遂げて

いる。「感動する心」や「豊かな感性」をはぐくむ教育が求められる今だからこそ、「書く」ことによってはぐくまれる豊かな心とコミュニケーション力は、次代を生き抜く子どもたちにとって必要不可欠なものではないだろうか。

今回の調査から、コンピュータなどの情報機器が発達しても、生徒の手書き文字への関心は高く、だれもが「上手になりたい」と願っていることもわかった。そうした児童・生徒の要求にいかに応えていくかが、今後私たち指導者に課せられた課題ではないだろうか。

〈参考文献〉

- ・小・中学校国語学習指導要領解説
- ・実践！小学書写（長野秀章編著）
- ・書写指導小学校編・中学校編（全国大学書写書道教育学会編）
- ・教科書－新しい書写（東京書籍）